

第三部

第5章 藩政の終末と幕末の動乱

第二節 安政の大地震

一 安政大地震

嘉永七年（一八五四）二月、再来したペリーと幕府は翌月、日米和親条約を結ぶ。この年は四月に京都大火、六月に伊賀上野地震と大災害が続いた。そして一月四日東海地震、五日南海地震、七日豊予地震が発生する。連動するマグニチュード七・三〜八・四の南海トラフ巨大地震が、全国に大きな被害を与えた。このため一月二十七日、嘉永から安政へ改元し、これらの地震を安政大地震と呼ぶ。近世の地震状況は、各地の古文書をひも解くことでしか判明しない。地元には伝わる古文書をもとに、伊予国の被害について大洲藩領を中心に見てみよう（大本敬久「愛媛県地震史」）。

二 東海・南海・豊予地震の連動

一月四日朝の地震は、東海地方沖が震源であるため大きな揺れはなかったが、五日夕方に紀伊半島沖を震源とする「前代未聞の事」なる地震によって、多くの家屋が破壊され、人々は避難した。大洲城は門・櫓が大破。城下町では、片原町・舩形町・中村・本町の家屋が倒壊・焼失する「大荒れ」となり、他の町でも「中イタミ」の被害があった。藩主一族や家老などの武家も仮設小屋へ避難した。七日朝には各家に戻り片付けをしていたところ、昼前に豊予海峡を震源とする大地震があり、再び避難した。寒さは厳しく霜や雪、あられで難儀している。藩は、城下

町と中村に御救い小屋を建てて粥を支給したほか、御蔵米を低価で払い下げた。城下町の丸屋卯兵衛は白米・味噌・昆布を出し、中村の酒屋・米屋は救い粥を一日間続けた。一四〜一五日になっても余震は続いたが、揺れは小さくなり、家に戻った。内ノ子は揺れたが被害は少なく、高橋家が城下へ来て救米を低価で販売した（大洲藩小姓大西藤太「大地震荒増記」）。

三 津波の襲来

五日の夕暮れに、宇和島藩領深浦など御荘湾（愛南町）では津波によって家屋約七〇軒が流出し、宇和島・吉田藩の新田はすべて浸水した。八幡浜は田中町まで潮が

来て約一〇〇軒が倒れ、川之石では大船が三島神社まで打ち上げられた（伊方町・阿部家文書）。その様は「津波さしこみ候時より、引ぎわが殊の外おそろしきこと」と記される（大洲市・兵頭家文書）。

四 郡中の被害と復興

伊予灘側で津波被害はなかったようであるが、津波到来のうわさで人々は近山へ逃げ迷ったとされる。大洲藩領の重要港湾である郡中三町（伊予市）では、家屋倒壊で八人死亡、火事の被害もあった。藩は避難小屋を四カ所設置した。上灘村亀岡次郎吉が白米一石七斗余を献上したところ、藩が御救米として三町の「極難」三一人に

支給した。「中難」四八四人には、低価格米が売り渡された。この他、盗人の捕獲や道後温泉の湯が止まったことも記されている(郡中湊町「大地震記録」)。浜では、地割れ、液状化現象も見られ、波止場が大破した(「塩屋記録抄」)。地震後の復興は藩を挙げて行われた。安政二年(一八五五)の城内修復人夫として五百木村・城廻村へ八〇人が割り当てられ、四〇人が夏に働き、二〇人分は銀納、二〇人分は洪水のため控除された。同年一〇月二日には江戸でも大地震が起き、江戸屋敷が損傷し、その修理も行われた(「永代記録」)。死者数万人にのぼるといふ巨大地震であるが、一〇月四日に宇和島で大地震が起きた記録が発見され(「薬師神家筆筒裏書」)、東南海との連動が注目されている。

五 芸予地震

安政四年(一八五七)八月二五

日・二七日にも、伊予灘を震源とする大地震が発生し、大洲城内西門・高欄・櫓・千間塀が崩れた。嘉永七年(一八五四)時よりは揺れが短く、被害も少なかったようである(「大地震荒増記」)。郡中三町では四人が圧死し、数日間避難が続いた(「塩屋記録抄」)。以後もこの地域では、明治三八年(一九〇五)の芸予地震、昭和二年(一九四六)の昭和南海地震と大きな地震が続くが、明治以前の災害は人々の記憶から失われ、安全神話が形成されていった。

安政期は全国的に大災害が頻発し、幕府政治は一層混乱する。一方この頃には、地震後に津波から逃げるのは常識であり、地震後にはすぐ、治者や富者が被害者救済を行う態勢が整っていた。

地震の記録は、古文書からしか判明しない。そこには、恐るべき大地震の被害状況と災害に立ち向かった先人の知恵が刻まれている。未来の地震被害と対策は、歴史にこそ学ぶべきである。